

タイトル	誤解の功罪：広義の誤解と適応性(<特集論文>ヒューマンエラーの心理学 Part2-誤解が生じるメカニズム)
著者	田村, 卓哉
引用	北海学園大学経営論集, 4(4): 103-116
発行日	2007-03-00

誤解の功罪

— 広義の誤解と適応性 —

田 村 卓 哉

本稿は、2006年11月25日に行った上記講演の記録を大幅に書き換えたものである。私の担当は一連のシリーズの3回目にあたり、本論集に掲載されている小島康次教授の講演に加えて、佐藤淳教授の講演「誤解の心理学——知識獲得における推論の不足——」に引き続くものであった。両教授の講演は、言語理解や知識獲得等における「推論」に重点が置かれたのに対して、4回目の後藤啓一名誉教授の講演は、組織内コミュニケーションとカウンセリングが取り上げられる予定であった。したがって、それらとの過剰な重複を避けつつ、三先生のお話と関連づけるトピックとして、自閉症スペクトラム障害者の認知特性と記憶機能を中心に据えた。また、それと同時に、トピックが狭すぎることを懸念し、講演の前半では、心理学の中で取り上げられる「誤解」の広がり等にも触れた。本稿では、その一部を紹介する。

はじめに

ご紹介いただきました田村です。よろしくお願ひ致します。誤解についてお話をさせていただくことができ、いろいろなことを考えることができたことを、私自身は非常にありがたく思っております。これまで、小島先生と佐藤先生からお話があったわけですが、私のタイトルは、「誤解の功罪」とつけました。いいところと悪いところ、広い意味での誤解

と適応。つまり私たちが生きていく上でうまくやっていくことと誤解との間にどういう関係があるのか。今までのお二人よりもちょっとぼんやりしたお話になってしまうかと思うのですけれども、一度、誤解というものを少し広げて考えてみようというのが、今日のお話の主眼になります。

もちろん、ぜひとも避けなければならない誤解が多いのは当然です。ここに卒業生の方から紹介してもらったビジネス雑誌の記事があります。学術的なものとは言えないのですが、仕事上のエラーについて行われた簡単なアンケートがありまして、その中で回答者達が誤解というものをどう捉えているか、想像することができます。興味深い例だと思いましたが、常識的な例として、簡単にまず御紹介したいと思います。

それらを見ていくと、今までのお二人の先生のお話にもあったと思うのですけれども、私たちが物を見聞きしたり判断したりする心の働き、認知というものには、誤解というものが生じやすい仕組みを宿命的に背負っていると考えざるを得ない。その中で、先のお二人は主に推論、考えること、自らの知識を現象の理解に利用したり、現象から何か知識を得ることについてのお話が中心だったかと思いますが、私の方からは、知覚や記憶に関係する例をご紹介したいと思います。(知覚については、本稿では割愛。)

誤解をどうしたら避けられるかということ

に関心がある皆様には、大変申しわけないのですが、もし私たちが非常に誤解しやすい傾向といったものを持っているとすると、それは何らかの意味で、別の場面では非常に役に立っているからかもしれない。誤解というものの一つをとっても、必ずしも都合の悪いものばかりではないだろうと考えまして、それが心理学に限らず、どのような広がりを持っているか、ということ断片的に挙げてみました。その一端を資料としてお配りしましたので、ご参考にしていただければと思います。それと関連して、以前に、学生さん達と「自分で自分のことがよくわかっていない」と考えざるを得ない日常例を考えたことがあります。広い意味では、これも「自分についての誤解」と捉えることができますので、一緒にお配りしました。頷ける例が多いと思いますので、ご自身を振り返るためにも参考にしていただければと思います（c.f.巻末当日配付資料1と2）。

私のお話の中心は自閉症者の方々の自伝になります。ちょっと長いビデオなのですが、いろいろなことを考えさせられるものですから、敢えてご紹介することにしました。小島先生からの御紹介は過分ですが、私もそんなに臨床実践を続けているわけではないのですが、たまたま障害を持った方々をサポートする団体に加えていただいたりしているものですから、いろいろと勉強させていただいて来ました。最近では、自閉症スペクトラム障害と呼ばれたりしますけれども、自閉性障害を持った方々が非常に独特な物の見方、考え方、受け取り方をしている。我々が意識するしないにかかわらず自然にしているようなことが苦手で、いかに苦勞して生活しているかということを紹介したビデオをちょっと見ていただこうと思います。もちろん、彼らもいろいろな誤解をするのですが、その誤解の仕方が、いわゆる健常者、最近では定型発達者と呼んだりもしますが、とは違う。

その違いを通して、誤解の功罪を考えていただければと考えた次第です。

後でご覧いただくとおり、彼らは非常な苦勞を抱えながら暮らしていらっしゃるわけですが、その代償として、実はかなりすぐれた能力、我々には考えられないような能力を持っているという面があります。ここは実験研究になるのですが、一つだけ記憶に関するそのような例についてもお話をしたいと思います。以上のような内容でお話しさせていただきます。

「誤解」に関連する言葉

まず、画面の方をご覧下さい。誤解という言葉に関係ありそうな言葉、概念というのをいろいろ考えてみました。短い時間ですので、すべては記憶できないと思うのですが、こんな例を私は考えてみましたので、皆様もよければ、ぼんやりと結構ですので、記憶していただければと思います。

誤解に関連することば

（ちょっと、記憶してみてください）



誤り 勘違い 早とちり 不注意 嘘
 先入観 聞き違い 行き違い 犯罪
 考えすぎ 常識 推論 知識 文脈
 悪徳商法 誇張 広告 語弊 記憶
 暗示 えん罪 作話 思考 思い入れ
 美化 犯罪 信念 邪推 無知 悪意
 証言 誤認 理解 誘導 虚構 混乱

スライド1 聴衆向け記銘材料

誤り、勘違い、早とちり、みんな誤解に関係しますよね。誤解するとき、不注意も影響しているかもしれない。嘘、先入観、聞き違い、行き違い、犯罪、考えすぎ、常識、推論、大体ばつと見ていただけましたでしょうか。真ん中より下にある作話については、後

でちょっとお話の中に出てくるかと思いますが、こんなことが誤解に関係があるのではないかと考えてみたわけです。これらは、後でお話する自閉症者の方々に関係して、もう一度出て来ます。

仕事上のミスと「誤解」

仕事の中で起こるミスに関連して、日本経済新聞社から出されている日経ビジネス・アソシエという雑誌の記事を、ある学生さんが紹介してくれました。2006年5月2日号に載っていたものです。検索エンジンで有名なYahooのアンケート対象者に登録しているサラリーマン341人に、例えば「自分でミスをするときに、どんなミスが多いと思いますか」ということを聞いた答えのまとめですが、今回のお話のために、スライド用に整理してみました。

あなたに多いミスは？			
日経ビジネス Associé 2006.05.02より (via ヤフーリサーチ 341名)			
ミスの種類	強気(a)	弱気(b)	(b)/(a)
忘れ物	32.9%	48.8%	1.48
計算ミス	20.8%	38.4%	1.85
話の聞き違い	19.4%	40.0%	2.06
書類やメールの書き違い	17.6%	42.4%	2.41
パソコンの操作・入力ミス	19.9%	31.2%	1.57
言い間違い	14.4%	25.6%	1.78
人の名前を間違える	9.7%	15.2%	1.57
書類などの読み違い	8.3%	16.8%	2.02

スライド2 仕事上のミスに関するアンケート
日経ビジネス Associé より 一部改変

一つだけ補足しておきたいと思うのですが、表の中に強気、弱気と2列出ていますが、これは表を小さくするために仕方なくつけましたが、元の資料では使われておりません。強気というのは自分でそれほどエラー、ミスが多くないと思っている方の回答です。それに対して弱気というのは、自分はかなり

間違いが多い方だと思っている方の回答です。表の上から5番目ぐらいまでは、実際のデータの上位から5番目までをそのまま並べてあります。残りは抜き書きをしたのですが、忘れ物、計算ミス、聞き違い、書き違い、パソコンミス、言い間違い、書類などの読み違い、いろいろ出てまいります。全体としてはちょうど中間の回答率ということになると思うのですが、太字でイタリック体になっているのは、強気の方と弱気の方との間で、特にそのミスが多いと思う傾向に差が大きい回答。つまり、これは(b)÷(a)という値が大きい項目に印をつけてあるわけです。それらに注目すると、やはり誤解に関するものが多い。そのことを裏づけるのが次の表です。

同じ方々に行ったアンケート内容で、今度はミスの内容ではなくて、そのミスを起こした原因の方を尋ねた結果です。つまり、なぜいろいろなミスをしてしまったのかと。

あなたに多いミスの原因は？			
日経ビジネス Associé (via ヤフーリサーチ 341名)			
ミスの原因	強気(a)	弱気(b)	(b)/(a)
慌てた	31.0%	42.4%	1.37
慣れていたので油断した	33.3%	36.8%	1.11
ほかのことに気を取られた	28.7%	40.8%	1.42
思いこみ	20.4%	44.8%	2.20
早とちり	14.4%	39.2%	2.72
知識が足りなかった	14.8%	35.2%	2.38
甘く見た・自信過剰だった	12.5%	31.2%	2.50
確認する習慣がなかった	9.7%	26.4%	2.72

スライド3 ミスの原因に関するアンケート結果
スライド2と同様

そうしますと、これはますますきれいなデータだと思うのですが、自分でミスが比較的少ないと思っている方と多いと思っている方の回答に開きが生じやすい。差が強く出るのは、主に表の下半分なので、思いこみ、早とちり、知識の足りなさ、

甘く見たなど、すべてこれは誤解に関係することなのではないかと思うのです。知識が足りなかったというのも、事前にはできると思ったのだけれども、思ったほど自分に知識がなかったというふうに考えると、これも一種の誤解と言えるのではないかと思います。さらに、甘く見た、自信過剰だったというのも、自分を買い被っていたと。自分の能力の過信という意味では、一種の誤解と言えるかもしれない。

このビジネス雑誌に出ていた簡単な調査結果から見えてくることは、仕事上のミスとして皆さんが思いつかれるものの中には、誤解が多数含まれているということ。ミスの原因の方は、あくまでもこれは、自分がこういうミスを冒したのは、本人が振り返って、このせいだと考えたところが肝心だと思うのですが、その原因として、上位には不注意によるものが多いと思うのですけれども、誤解への帰属も多いということです。帰属というのは、心理学の特殊用語になってしまうかと思うのですが、原因について、……のせいだというように我々が原因をそこに求める、それが原因だと推定したりすることを、帰属と心理学では呼びます。なおかつ、表では強気、弱気と2列に分けてお示ししましたけれども、自分でミスが多いと思っている方とさほどミスは多くないと思っている方との間で、誤解に対する帰属傾向に随分大きな差がある。要は、ミスが自分は多いと思っている方は、自分が誤解しやすいと思っている傾向が非常に強いということが、ここに出てきております。

では、それは本当なのだろうかという、これはなかなか難しい問題だと思います。そもそも「真の原因」というものを、数を限って特定することが難しいことの方が多いのではないのでしょうか。心理学の世界では、何かの結果が起こったときに、それが何のせいだと考えるかということについて、これまた二重の誤解ということになるかと思うのです

けれども、人間は帰属のエラーというものを非常に冒しやすいということがよく指摘されます。例えば、複数のことがらが原因である結果が起こっているかもしれないのに、特に目立つ一つの要因のせいだと決めつけてしまうというようなことは、よく起こるのです。昨年から続くこの公開講座のテーマが「ヒューマンエラー」になっていまして、今年の主題が「誤解」ですから、それに関係あるものとして、一つだけ御紹介させていただきました。

調査結果から見えてくるもの

- 仕事上のミス
「誤解」と呼べるものが多数含まれる
- ミスの原因(本人が振り返って考えた)
不注意に加えて、「誤解」への帰属が多い
- しかも、自分でミスが多いと自覚している人とそうではない人を比較すると、「誤解」に関連する帰属傾向に大きな差がある。
- 帰属のエラーは心理学的知見が多い部分
帰属自体が「誤解」である可能性もある

スライド4 本節のまとめ

コミュニケーションと文脈

コミュニケーションについては、おそらく次回の後藤先生のお話の中で、主題的に取り上げられると思いますので、ここでは、後でお話する自閉症者の方々に関係する一面だけを簡単に触れさせていただきます。スライドでご紹介するのは、本の一節です。神戸女学院大学で倫理学を教えていらっしゃる内田樹先生の著書の中に、「態度が悪くてすみません」というひどい題の新書本がございます。その中の短いエッセイに「コミュニケーション失調症候群」というものがあり、その中から抜き書きさせていただきました。

内田 樹「コミュニケーション失調症候群」
「態度が悪くてすみません」角川oneテーマ21所収

コミュニケーションにおいて、メッセージの「解釈の仕方」は、語詞レベルではなく、非言語的なレベルにおいて受信される側に「察知してもらう」ほかないということである。

逆から言えば、表層的な語詞レベルのメッセージでは、言葉は無限の誤解の可能性に開かれているということである。

スライド5 コミュニケーションの宿命
内田 樹(2006)より

何を言っているのかといいますと、こちらが何か言葉、音声を発します。しかし、コミュニケーションというのは、実際に発せられた言葉、字面だけではなくて、非言語的なこと、その言葉を受け取る相手の側が、それ以外のいろいろなことも含めて、それをどう受け取るか、察知してくれるかにかかっている。言い換えれば、どういう言葉を発したかわかりませんが、字面上の言葉のメッセージは、受け取る側がどういう条件を持っているかによって、どのようにでも誤解される可能性が開かれている、ということです。

これだけを見ると何のことかわからないと思うのですが、実は内田先生は、セクハラやアカハラ(アカデミック・ハラスメント)、つまり大学の先生が自分の権威や権力を笠に着て学生等をいじめめる例、セクシャル・ハラスメントの中でも、言葉によるセクシャル・ハラスメントについて書いている中に、ぼんとこれが挟まっているのです。なぜか。先生の方は、大して悪意もなく、何かを言うかもしれない。しかし、それに学生さんが非常に傷ついているかもしれない。ひどい場合だと、それをどこかに訴えるかもしれないことになるわけですね。そのときに、先生はどう言うか。「そんなつもりで言ったのではない」という弁解をすることになると思うわけです。確かにそれは事実かもしれませんが、

でも、そこで用いられた言葉が、学生さんに対して非常に不愉快な思いをさせているかもしれないということも否定できません。

内田先生は、自分はいろいろとひどいことを言っているけれども、幸い訴えられたことはないとおっしゃる。むしろ、それはなぜかということに彼は問題にしているのですけれども、おもしろいです。グレゴリー・ベイトソンの「精神の生態学」(2000, 邦訳)なども引用しながら、コミュニケーションの失調の端的な徴候として、言葉はそれ自体として理解できても、その言葉をもって、「何を言おうとしているのか」、「何を伝えたいのか」が分からないということを挙げています。後半は、そのようなコミュニケーションの基礎となる人間関係が脆弱になっていることを等閑視して、言葉遣いの問題だけを取り沙汰するのは、いかがなものか、と言う趣旨のことを述べられているのですが、その部分はちょっと危険ですので省略いたします。ただ、相手の意図を汲み取ることの難しさ、それが私たちの間でも常に問題となるのに、自閉性障害の方々の間では、想像を超える深刻さがあるのだということをご理解いただくための予備情報として紹介させていただきました。

記憶のエラー

次のスライドは記憶のエラーの例です。これも、自閉症者の方々に関係がありますので。出典はお配りした参考文献にも入れてあります。日本経済新聞社の文庫本として翻訳が出ているのですが、原題は“The Seven Sins of Memory”。「記憶の7つの大罪」といったところでしょうか。この「7つの大罪」に関連させて、映画にも「セブン」という怖い作品がありましたが、実はキリスト教的な伝統に基づいています。こういうときの罪というのは、ちょっと日本語にはなりにくい言葉です。いろいろ考えてみたのですが、

例えば仏教的な概念では「業」とか「性^{さが}」というのに近いかと思います。つまり、本質的に人間が持っている、まずい傾向のことを指していると思っていただければいいと思います。

記憶のエラー例

Schacter (2001) "The Seven Sins..."

- 物忘れ Transience (うつろいやすさ・はかなさ)
- 不注意 Absent-mindedness (忘れっぽさ)
- 妨害 Blocking (人の名前、ど忘れ、のどもとまで)
- 混乱 Misattribution (既知感、虚再認、盗作)
- 暗示されやすさ Suggestibility (偽の記憶・自由)
- 書き換え Bias (認知的不協和・後知恵・偏見等)
- つきまとう記憶 Persistence (苦しい、辛い思い出)



スライド6 記憶におけるエラー

シャクター (2004) より

ここでは、あくまでも記憶の誤りやすさということなのですけれども、幾つか例が出ております。例えば Blocking というのは、あれだよあれと、ここまで出てきているのだけれどもというようなこと、ど忘れというようなものがありますよね。おもしろいのですが、日本語だと「のどもとまで出てくる」ですけれども、英語だと「tip of tongue」、舌の先まで出てくるというのですね。そういう違いがありますけれども、よく知っているものを一時的に思い出せなくなる場合のことです。

“Misattribution”。この“attribution”というのが、さっきお話をした帰属ということ。 “Misattribution” というのは、帰属間違いです。例えば、出来事については覚えているのだけれども、それがいつ、どこで起こったかということについて勘違いをしてしまう。

もう死んでしまったのですけれども、私の叔母が非常におもしろい帰属間違いをした経験を話してくれたことがありました。東京の世田谷区のかかなり高級な住宅地の社宅に住んでいた時期があるのですけれども、決まった

曜日にごみを捨ててに行くたびに、何回も非常にすてきな紳士があいさつをしてくれると言っているのですね。どこかで会ったことのある方だなど、何か見たことのある方だなど、どうしても思い出せない。けれども、ある日、あつとテレビの前で気がついた。彼は、NHKの7時のニュースのアナウンサーだったので。ですから、毎日テレビで彼のニュースを見ているのだけれども、それがまさか自分の家のそばのごみ捨て場ですれ違っているなんて思わなかったのでしょうか。何か知っているとは思ったのだけれども、それはどこで会って、どういう人かを思い出せないというようなケース。これに近い経験は多くの方におありなのではないでしょうか。仕事上で、ある要件や任務を覚えてはいるけれども、それが誰とどこで交わした会話に基づくものなのか、取り違えてしまうといったことはよく起こりそうなことです。無論、逆の場合もよく起こるわけで、彼と何かを約束したのだけれど、その内容が思い出せない、とか、もっとひどくなると、約束したこと自体をすっかり忘れていて、といった場合は、“Transience”や“Absent-Mindedness”に相当するかと思います。特に、認知症などの場合は、その記憶力の低下自体が自覚できないという点で深刻であることは、よく指摘されるとおりです。

“Suggestibility”，これは、臨床的にも、今は法律、裁判の関係でも非常に問題があると指摘されているデリケートな点を含んでいます。記憶がいろいろな暗示、それから示唆等によって書き換わってしまう。本来なかったことが、あったことだというふうに思い込んでしまうというような例です。例えば、意図しない一種の誘導によって、偽の虐待の記憶を持ってしまったケースなどもよく取り上げられます。最初の方でお話した仕事上のエラーにおける帰属のお話にも関係しますが、特に臨床的なケースでは、ご本人が悩んでおられ、その原因だとご本人が思っておられる

ことが本当かどうか、ということは、必ずしも確かめられないのがむしろ普通だと考えなければなりません。ですから、おそらくご本人の思い込みであるかもしれないけれど、それを前提に、不幸な記憶やイメージを書き換えていく、という作業が必要になることもあります。

“Persistence” というのは、長く続く、粘り強いということですが、我々には忘れたくても忘れられない嫌な思い出というものがあります。例えば、PTSDなどが顕著な例ですが、実はそれと似ていて、ちょっと性質が異なると考えられている自閉症者の方々に特有な記憶があります。これまた、参考資料に載せた杉山先生(2000)のご著書では、タイムスリップと呼ばれています。ある出来事をきっかけに、恐ろしく昔の記憶が、圧倒的な現実感をもってよみがえってきまうという現象です。昔の生活史をご存じのご家族でもない限り、なぜパニックを起こしたのか、そのきっかけがあまりにも特殊で、周囲には理解できないということもよく起こるようです。

自閉症スペクトラム障害者の声

ようやく自閉症スペクトラム障害者の話になります。基本的な説明については、スライドをご覧ください。その後、実際に当事者達の生の声を聴いていただきます(この後、ビデオを視聴した。これらは、NHK教育テレビ等で放映されたドキュメンタリーを編集したものである。以下は、その要約。)

視覚の障害

ある高機能自閉症者の女性は、保育園に入園した日、パニックに襲われた。彼女には、ほかの園児たちの顔がまるで「のっぺらぼう」のように見えた。

自閉症スペクトラム障害

- アメリカ精神医学会 DSM-IV-TR
「通常、幼児期、小児期、または青年期に初めて診断される障害」
- 精神遅滞 ・ 学習障害 ・ 運動能力障害
- コミュニケーション障害 ・ 広汎性発達障害
- 注意欠陥および破壊的行動障害 ・ チック障害
- 幼児期または小児期早期の哺育、摂食障害
- 排泄障害 ・ その他

スライド7 アメリカ精神医学会の診断基準による幼児期等の障害一覧 DSM-IV-TR (2003) より

広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorders)

- 自閉性障害
- レット障害
- 小児期崩壊性障害
- アスペルガー障害
- 特定不能の広汎性発達障害(非定型自閉症を含む)

知能等もさまざま、特徴の濃淡もさまざまなので「自閉症スペクトラム障害」と呼ばれる

スライド8 DSMにおける広汎性発達障害

自閉性障害とアスペルガー障害

DSM-IV-TRによる診断の3つの柱

- 1) 対人的相互反応の質的な障害
- 2) コミュニケーションの質的な障害
- 3) 行動、興味および活動の、限定的、反復的、常同的な様式

このうち、

- 2) を伴わないのがアスペルガー障害

スライド9 自閉性障害とアスペルガー障害

聴覚のトラブル

また、別の高機能自閉症者は聴覚のトラブルを訴える。どの音も同じように耳に入ってきて、自分が聞きたいことに集中できないと言う。普通の人には、聞くべき音だけを拾い上

げる高指向性マイクロフォンのような聴覚を持っているらしいが、ご本人は環境音を締め出すことができないので、喧騒の中では人の話が理解できない。

表情知覚の不全

人の感情がわからない、表情が読み取れないという悩みは、多くの高機能自閉症者に共通している。相手が私に好意を持っているのか、悪意を持っているのか、認識できない。仕方なく頭で計算するのだが、計算結果の方は余り当てにならない。どうやら普通の人たちは、他人が自分に好意を持っているか、悪意を持っているか、感じるができるらしい。みんなは人と接した経験を積み上げて、それを参考に他人の本心を読んでいるらしい。しかし、ご本人には他人の本音を感じる感覚がないし、経験を集積しようにもその場所がない。

感情理解の困難さ

また、別の高機能自閉症者の談話。自分にも喜びの感情等はたしかにあるが、例えば、幸せなのに同時に不幸である、愛し合っているのに直後に憎しみ合うなど、複雑な感情は理解できない。

高機能自閉症者ご本人のインタビュー

森口奈緒美氏（自伝「変光星」の著者）

子どもの頃から、ひどいいじめにあった経験部分の引用他。「自閉症者の人は、普通の人と頭の規格・フォーマットが違うので、あまり人間世界の常識を押しつけないでほしいと思っています。自閉症でもいろいろだから、一概には言えませんが、例えば自閉症の人は宇宙人かもしれませんが、出身の星はそれぞれに異なるので、それぞれの星の文化を認めていただきたいと思います。」

アスペルガー障害者ご本人のインタビュー

ニキ・リンコ氏（作家・翻訳家）

コミュニケーションの難しさ。会話の最中でも、相手がいて、相手は人で、相手に伝えるべきこと、伝えたいことを言葉にする必要があるということ、気をつけていないと忘れる。

小さい頃、よい子は友達ができると知ったけれども、友達という概念がよくわかっていなかった。例えばテレビの子供番組では、視聴者を「テレビの前のお友達」と言うので、銀行や空港などに行くと、テレビの前に立ってみたりした。また、周囲の子どもに友達になってくれるかどうかを尋ねて、了承してもらえると、安心してそれ以降無視をしたこともあるとのこと。

因果関係の把握が苦手。例えば、レストランでの注文。注文という行為が理解できていなかった。言え、言ったものが出てくるという因果関係を知らなかった。本人にとっては、意味のない行為の連鎖だったが、注文に必要なせりふを暗記して、正確に繰り返していた。

ご本人の転機となった海外での自閉症者キャンプでの体験談。参加者は、受付でコミュニケーション・コントロールバッジを渡される。透明のカードケースに、赤、黄色、緑の紙がセットされたもので、かかわらないでほしいときは赤、親しい人とだけ交流したいときは黄色、人と交流したいけれども、自分から話しかける自信がないので、そちらから話しかけてほしいという人は緑のカードを胸につける。どんな交流もオーケーのときは外す。

（ビデオの要約はここまで）

最後のコミュニケーション・コントロールバッジが大学でも使えたら、どんなに幸せかと思いますね。ああ、小島先生が近づいて来るから挨拶しなきゃとか、ここにいる学生さ

んは、果たして僕の講義の受講生なのかどうか、「やあ」と言わないと失礼ではないかとか、こちらは覚えている顔なので軽く手を挙げたら無視されたり。ある意味では、我々は四六時中そういうことを考えて生きていますよね。物事の因果関係というものも、いつも意識している。何かを言われれば、その意味等も考える。いつもそういうことを繰り返しながら、森口さんやニキ・リンコさんのお話を伺っていると、それはとても大変な作業だということが分かります。

次のスライドは、ローナ・ウィング先生という、イギリスの児童精神科医の先生の本からまとめました。ご本人のお子さんも自閉症なのですね。高機能自閉症とアスペルガーというのは、特に区別しなくていいだろうというのが彼女の立場なのですが、これらの方々には多かれ少なかれ、この三つの障害がある。社会性の障害、コミュニケーションの障害、そして想像力の障害です。アメリカ精神医学会の診断基準ですと、このうちコミュニケーションの障害がないのがアスペルガー障害ということになっているのですけれども、さきほどのニキさんを見ていただければわかるとおり、小さいころ、あなたにはお友達がいなければだめだと言われる。偶然、テレビの出演者が視聴者の子ども達に向かって「テレビの前のお友達、こんにちは一」と言う。だから、

テレビの前に行けば、お友達ができると思って、彼女はこうやって立っていたわけです。思考・推論の障害なのか、言葉の障害なのかわからないという感じもいっぱいある。ごっこ遊びというようなものをしない。ただ見ているのがすごく好き。ニキさんの場合は、今でも、つらくなってくると万華鏡を見ているのが一番落ちつくと言うのですね。見える模様に何も意味を見ようとか、解釈しなきゃと思う必要がない、それが彼女の本来の世界だと思います。自分で自分を軽く叩いたり、自分を噛む、いわゆる自己刺激行動も、仕事が詰まってきた時のパニック防止に使っていらっしゃるようです。

ビデオの後で、ようやくここまで来ましたが、もうやめなければなりません。状況、因果関係、他人の気持ち、他人の立場等が理解できないという自閉症者の大変さというのは、ビデオ等である程度理解していただけたのではないかと思います。勝手な人、わがままな人、変な人というふうに誤解されます。他人の立場で考えることができませんし、おかしい推測をしますので、ある意味では、無理もないことです。

森口さんは、自分たちのことを宇宙人と呼んでいました。その中でも、興味深いのですが、自閉症者はさまざまな星から来ていると。みんな宇宙人だけれども、それなりに違うということも思っただけです。ニキさんも、ご自分のホームページを持っていますが、それが「自閉連邦在地球領事館附属図書館」というタイトルなのです。別の雑誌で読んだのですが、森口さんが別の場面で「あなたは非常に苦労して適応するようになったけれども、小さいときにどんなものがあつたら助かったと思いますか？」と訊かれました。その答えは決定的です。「常識事典があればよかった」と言うのです。つまり、定型発達者のいう「常識」がないから、彼らは一々それを、こういうときはこういうふう

ローナ・ウィング先生の意見
高機能自閉症とアスペルガー障害、臨床的には区別不要

●●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●
●●●●●

「3つ組の障害」

- 1) **社会性の障害**
独特の人づきあい、正直すぎ、積極すぎ、暗黙のルールが苦手
- 2) **コミュニケーションの障害**
話がくどい、曖昧が苦手、そぐわない用語、一方的、言外の意味・比喩・表情・しぐさ等の理解が苦手... キャッチボールにならない
- 3) **想像力・創造性の障害**
ごっこ遊び、ただ見る・飽きない、こだわり、常同行動

その他
知覚過敏、不器用、心を読む、注意、計画、パニック

スライド 10 3つ組の障害 (Wing, 1998)

にするのです、人のこういう表情は悲しいときなのですということ、一つ一つ教科書のように見て、書いて、覚えなくてはいけないわけです。これは、我々は暗黙のうちに覚えてきたことですから、すごく難しいことですよ。それを、教科書のように書き出すことはほぼ不可能だと思います。しかし、「Social Story Book」といって、こういうときにはこういうふうにするという、自閉症の方のための How to 本がいっぱい作られています。

彼らが苦勞して1から覚えていく。こういうときはこうしなさいと、教えられて覚える。認知科学で言う production rule ですね。私たちは、それを発達の過程で、見ず知らずの間に身につけてきているわけです。自閉症の話でよく例示される話があります。「お父さんいますか」と電話で言えば、子供が「はい」と答えますよね。しばらくして、子供がガチャンと電話を切ってしまうのです。もう少し年長の子供ならば、「お父さんいますか」は、「いるのなら出してください」という意味だという裏のメッセージもわかるようになりますから、「はい、ちょっとお待ちください」と言うことになるのですけれども、それを言わないで、じっと待っていると、向こうから「お父さんを出してください」ともう一回言ってくれないから、どうすることもできなくて電話を切ってしまうのです。自閉症の方もこれをやる。この話が出ると、聴衆の中から「うちの子供も小さいとき、これをやった」という反応が多数出るわけですね。大きくなれば、そういうことはない。少々お待ちくださいとか、おりませんとか、どちら様ですかとかと言うようになりますよね。そういうことが非常に難しい。森口さんがシナリオのない劇の舞台と言っていました。

そこで、私たちは、それぞれ状況に応じて、いろいろなことを考え、過去の経験をもとに類推したりして、対処しているわけですよ。

そうすると、どうしても先入観ですとか、先読みとか、深読みというようなものは、私たちがうまくやっていくためには必要になるわけですよ。過去の台本ですよ。それから、筋書きがどうなるのが普通かというような知識をいつも使って私たちは暮らしているし、そうしないと大変なことになる。非常に難しい。

自閉症者と記憶

それらが苦手な彼らなのですけれども、いわばその代償のように、実はある種の記憶は非常に正確であるという面をお持ちです。最初にいっぱい言葉を見ていただいたのですけれども、この中にありますでしょうか？

誤解に関連することば
(先ほどのリストにありましたか?)



間違い 信念 誇大広告

期待 靈感商法 偏見 詐欺

思いこみ 論理 情報 混同

思い違い

スライド 11 聴衆向け記憶再認課題
スライド 1 にあった言葉は？

あったと思うものが二つ以上ある人。たくさんいらっしゃるんですよ。大半が出たのではないかという方。全部出なかったという方、いらっしゃるんですよ。

実は一つだけです。残りはみんな、さっきはなかったのです。私たちは意味とか連関で考えますから、何かこんな言葉があったような気がするということになってしまいますよね。これを虚再認と言います。実は自閉症の方は、次のスライドでお見せするとおり、健常者や前頭葉に障害のある方に比べて、呈示

されていないものを見たと思う虚再認がすごく少ないのです。ある意味では、正確な記憶を持っている。それは、単語間の意味連関を考えることなどが苦手だからだと思います。そのかわり、PTSDに似ているのですけれども、昔の嫌な経験などは、すごく正確に覚えていて、何かのきっかけでわっと出てきたりするのですね(タイムスリップ)。逆に、脳の前頭葉に障害のある方の一部では、虚再認が多発し、作話などが増える。本人も周囲も、何が真実なのか分からなくなるという困難も生じます。記憶の正確さと適応の間には、微妙な関係があるわけです。

時間が足りなくなりました。無論、自閉症スペクトラム障害者と比較して、私たちは「察し」がよいのだから、無用・有害な誤解を放置してよい、ということにはなりません。それらを回避するための手段として、クリティカル・シンキングやメタ認知のこともお話しするつもりでしたが、別の機会に譲らざるを得なくなりました。ただ、内田先生の例にもありましており、私たちは言葉上でのやりとりを超えて、表情や文脈等、様々な情報を使ってコミュニケーションをしているわけですから、限られた情報処理能力の一部を、通常以上に誤解の回避に向けると、やはり「自然なコミュニケーション」は損なわれる恐れがあります。いずれにしても、「あちら立てれば、こちら立たず」という面があることは自覚する必要があるように思います。

何よりも、私自身に自分の講義内容と説明能力について、深刻かつ重大な誤解がありまして、最後まで消化できませんでした。どうぞお赦し下さい。

虚再認現象 DRM パラダイム

- Deese (1959) が報告
- Roediger & McDermott (1994)が発掘・発展
- 一群の関連する単語のリストを記憶する
例えば、サンドウィッチ、ジャム、スライス、ハム、トースト、レタス、マーガリン、ドーナツ、ブレッド、フランス、角食、小麦、あん、バター、軽食 など
- 実際には出なかったパンを見たという報告多発

スライド 12 虚再認現象

記憶実験の結果

加藤元一郎(2006) 基礎心理学研究, 25(1), 67-74

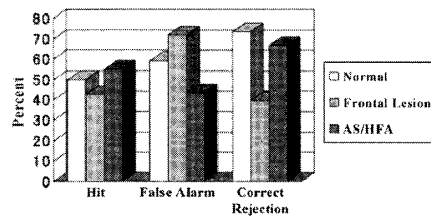


Figure 3. Number of responses (%) of hit, false alarm, and correct rejection on DRM paradigm in normal controls, patients with frontal lesions, and Asperger's disorder/High functioning autism (AS/HFA).

スライド 13 記憶実験の結果(グラフ)

加藤元一郎(2006)「展望記憶と虚記憶に関する臨床神経心理学的検討」基礎心理学研究, 25(1), pp. 67-74. より引用

記憶実験の結果

- Hit (実際に呈示されたものを「あった」と判断)
自閉症者>健常者>前頭葉障害者
- False Alarm
(実際にはなかったものを「あった」と判断)
自閉症者<<健常者<前頭葉障害者
- Correct Rejection
(実際にはなかったものを「なかった」と判断)
健常者>自閉症者>>前頭葉障害者

スライド 14 実験結果のまとめ

当日配付資料 1

功罪あわせて「誤解」のあれこれ

「誤解」・「嘘」・「だます」・「無知」等のコトバから連想するものを挙げてみました。無論、完全に網羅することは出来ませんし、整理も不十分です。分類は排反的ではありませんし、重複もあります。

心理学全般

- ・誤解しやすい人間像
- ・自己への無知・無理解・誤解
- ・利口なハンス
- ・顔面視覚説

知覚

- ・錯視 ・運動視 ・恒常性
- ・知覚的な判断の保守性
- ・ヴァーチャル・リアリティ
- ・対人知覚

コミュニケーション

- ・文字通りの「誤解」
- ・説得→詐欺、……商法
- ・本音と建前

記憶

- ・忘却
- ・記憶の変容
- ・虚再認
- ・誘導 後知恵バイアス

思考

- ・構え ・推論
- ・素朴概念・素朴理論・誤ルール
- ・クリティカル・シンキング
- ・ロジカル・シンキング

信念

- ・迷信
- ・偏見
- ・先入観
- ・ステレオタイプの知覚

臨床

- ・妄想→病識 ・軽度発達障害
- ・人格障害 ・告知
- ・うつ ・幻覚・幻聴・幻肢
- ・脳障害→疾病失認（左右差）
- ・フロイト
- ・暗示、誤った幼児期記憶

社会心理

- ・単純呈示効果（第1印象は重要）
- ・自己知覚理論

- ・同調・服従
- ・情動と帰属
- ・傍観者効果
- ・認知的不協和
- ・固定和幻想

科学・教育・歴史・思想

- ・子どものリアリティ
- ・褒めて伸ばす おだてる
- ・コペルニクスの転回
- ・胃潰瘍
- ・啓蒙思想

娯楽

- ・不思議図絵 トリックアート だまし絵
- ・手品
- ・腹話術
- ・落語（粗忽者）や漫才のボケ
- ・とんち クイズ
- ・ミステリ
- ・どんでん返し

深刻な例

- ・カモフラージュ
- ・政治（虚偽・隠蔽）
- ・広告
- ・事故（例：表示の紛らわしさに起因）
- ・戦争・ゲーム・スポーツ
- ・犯罪
- ・洗脳
- ・虚構（司法を含む）
- ・えん罪
（虚偽の自白・目撃証言）

諺など

- ・逆は必ずしも真ならず
- ・人は見た目が9割
- ・同床異夢
- ・見ると聞くでは 百聞は一見に
- ・美しい誤解と惨憺たる理解
- ・群盲象を撫でる
- ・あばたもえくぼ（恋は盲目）
- ・となりの芝生
- ・コロンブスの卵
- ・鳶が鷹を生む ←→ 蛙の子は蛙
- ・鯛の頭も
- ・杞憂
- ・サラリーマン川柳

巷では

- ・常識のウソ
- ・独創性
- ・古い
- ・血液型性格学
- ・超常現象

当日配付資料 2

「誤解」と「無知」について、学生達に考えてもらった例

(自他を問わず、「自分で自分のことが分からない (のでは)」と感じた経験は?)

感情・好み・態度の問題

そのもの

ある対象を好きなのか嫌いなのか、自分でよく分からない

理由

どうして好きなのか・嫌いなのか、理由が自分で分からない

食わず嫌い

表出と自覚の齟齬・コントロール不能

悲しくないのに涙が出る

キレる

心を読まれる・表情を読まれてしまっているような

緊張しないようにしようと思ってもできない

変化

とても欲しかったはずのものが、そうでもなくなる

嫌いだったはずの人が意外にいい人だと思えるようになる

音楽等、ハマったはずのものにいつしか飽きて、いきいきした感じがなくなる

店員に言われると、つい買いたくなってしまい、後で後悔

意図と行動の齟齬

衝動買い

あるものを食べたくて食堂に入ったのに、別のものを注文してしまった

思わず……してしまった、何気なく、知らず知らずのうちに、言った後で後悔

頼まれ事を、快く引き受けたはずだったが、時間が経つと不快に思えてくる

嫌だと思って始めたことが、意外に楽しかったりする

やらなければ、と思いつつ、ついつい後回しにしてしまう

言っていることとやっていることが違う

公の場面で、言いたことがあって発言を始めたが、話してみると主旨が変わってしまった

自己認知と意識

自分の性格(長所や短所)を言え、といわれても困る

他人から、自分では思ったこともない性質を指摘される

自分の声や動作を、自分で見たり聞いたりすると、とても違和感がある

簡単だと思って始めた作業が、意外に難しかったり、苦手だったり

疲労や眠気などの自覚

他人に指摘されるまで、自分の癖に気づかなかった

酔った時のこと

不快な夢:夢だと分かっているのに止められない

一度、気になり出すと、気持ちを切り替えられない

当日配付資料 3

参考文献・読書案内（あくまでもご参考まで：部分的かつ偏向しています）

- 浅田次郎(1998) 極道放浪記シリーズ 幻冬舎アウトロー文庫
 アメリカ精神医学会(2003) DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き 新訂版 医学書院
 安斎育郎(2004) だます心 だまされる心 NHK 人間講座テキスト
 池谷裕二(2001) 記憶力を強くする 講談社ブルーバックス
 池田謙一(1993) 社会のイメージの心理学：ぼくらのリアリティはどう形成されるか サイエンス社
 井上毅・佐藤浩一 編著(2002) 日常認知の心理学 北大路書房
 ウィング(1998) 自閉症スペクトル：親と専門家のためのガイドブック 東京書籍
 内田樹(2006) 子どもは判ってくれない 文春文庫
 内田樹(2006) 態度が悪くてすみません——内なる「他者」との出会い 角川 one テーマ 21
 梅森浩一(2004) 面接力 文春新書
 太田信夫 編(2006) 記憶の心理学と現代社会 有斐閣
 岡本浩一(1986) 社会心理学ショート・ショート：実験でとく心の謎 新曜社
 海保博之(2005) ミスに強くなる！：安全に役立つミスの心理学 中災防新書
 金沢 創(2003) 他人の心を知るとのこと 角川 one テーマ 21
 上瀬由美子(2002) ステレオタイプの心理学：偏見の解消にむけて サイエンス社
 菊池 聡 他(1995) 不思議現象 なぜ信じるのか：こころの科学入門 北大路書房
 北岡明佳(2005) 現代を読み解く心理学 丸善
 ギロピッチ(1993) 人間 この信じやすきもの：迷信・誤信はどうして生まれるか 新曜社
 後藤啓一(2003) わかりやすい人間関係の心理講座（品切れ中）
 椎名健(1995) 錯覚の心理学 講談社現代新書
 下條信輔(1996) サプリミナル・マインド：潜在的人間観のゆくえ 中公新書
 下條信輔(1999) <意識>とは何だろうか：脳の来歴，知覚の錯誤 講談社現代新書
 シャクター(2004) なぜ、「あれ」が思い出せなくなるのか：記憶と脳の7つの謎 日経ビジネス文庫
 杉山登志郎(2000) 発達障害の豊かな世界 日本評論社
 スタウト(2006) 良心をもたない人たち 草思社
 スミス(2006) うそつきの進化論：無意識にだまそうとする心 NHK 出版
 竹内 薫(2006) 99.9%は仮説：思いこみで判断しないための考え方 光文社新書
 中井久夫(1982) 分裂病と人類 東京大学出版会
 箱田裕司・仁平義明 編(2006) 嘘とだましの心理学：戦略的なだましからあたたかい嘘まで 有斐閣
 広田すみれ 他(2002) 心理学が描くリスクの世界：行動的意思決定入門 慶應義塾大学出版会
 ファーンハム(1992) しろくと理論：日常性の社会心理学 北大路書房
 ファインマン(2000) ご冗談でしょう，ファインマンさん（上・下）岩波現代文庫
 フリス(1991) 自閉症の謎を解き明かす 東京書籍
 ベック(1996) 平気でうそをつく人たち 草思社
 道田泰司・宮元博章(1999) クリティカル進化論：「OL 進化論」で学ぶ思考の技法 北大路書房
 森口奈緒美(2004) 変光星 花風社
 山岸俊男(1999) 安心社会から信頼社会へ：日本型システムの行方 中公新書
 山岸俊男(2002) 心でっかちな日本人：集団主義文化という幻想 日本経済新聞社
 ラマチャンドラン 他(1999) 脳のなかの幽霊 角川書店
 *パーナー(2006) 発達する<心の理論>——4歳：人の心を理解するターニングポイント ブレーン出版
 （小島康次・佐藤淳両先生 他訳）